

---

パブロ・ピカソとモノクローム  
— 《ゲルニカ》の色彩表現をめぐって—

---

パブロ・ルイス・ピカソ（1881-1973）の大壁画《ゲルニカ》（1937年）は、先行研究においてその政治性、多義性、象徴性を含む表現上の難解さゆえに数多くの言説、解釈が提示されてきたが、果たして問題は解決したと言えるのだろうか。しかも同時に、《ゲルニカ》は世俗的なレヴェルにおいて、「反戦・平和のシンボル」としての強烈なイメージが一般には定着し、その結果、作品自体を美術史的に研究することさえ困難な状況に置かれていると言えよう。

一方、こうした出口なしの現況に比して、《ゲルニカ》をフォーマリズムの観点から考察した包括的な研究は多くはなく、同作について形式的価値や意義が十分に解明されているとは言い難い。特に色彩の問題が看過されてきたことは注目に値する。《ゲルニカ》は油彩ながら、白から灰、黒に至る多層なるグラデーション、つまり複雑かつ微妙な「モノクローム」という特異な色彩表現で成立していながらも、しかし、その色彩的側面は単に印象論的にしか語られてこなかった。唯一《ゲルニカ》の色彩選択の着想源として、新聞記事の白黒写真や映画といった同時代の視覚媒体からの影響が指摘されているにすぎない。本発表では、従来のこうした時事的、外的要因に帰着されてきた《ゲルニカ》のモノクロームを、より重要な内的要因、つまりピカソ芸術の大きな枠組みの中で捉え直し、考察を深めていく。そして、これまで過小評価されてきたピカソ芸術と色彩の問題に対して新たな地平を拓きたい。

まずは、《ゲルニカ》のモノクロームの原点を探る試みとして、初期の3時代、すなわち「青の時代」、「バラ色の時代」、「分析的キュビズム」を、色彩の観点から洞察する。ピカソは、この連続する初期時代にモノクロームの手法を確立し、形式と内容との合一、あるいは逆に、それらの二律背反を模索した。例えば「分析的キュビズム」のモノクロームは、フォルムの優位性のために色彩を完全に排除した。一方《ゲルニカ》の場合は、白、灰、黒という色彩自体に意味を見出した末、モノクロームの採用を決定したと考えられる。その意味では、色彩の象徴性と主題の意味論にも言及せざるを得ないであろう。

以上を踏まえれば、色彩を白と黒に限定した上で、先行するモノクローム作品を《ゲルニカ》へと繋げる「白と黒のモノクロームの系譜」を設定し、外的要因や初期モノクロームとは異なる文脈から、その特異な色彩表現が連続性を持って《ゲルニカ》へと結実していく軌跡を辿ることができるだろう。さらに《ゲルニカ》以降、第2次世界大戦中の1940年代を中心に、戦争や死を象徴する色彩として、ピカソ作品における白と黒のモノクロームは一層一般化していくのである。